

平成 31 年度 川口賞報告書

報告者：江川 史朗（理化学研究所生命機能科学センター(採用当時は Yale 大学所属)）

参加学会：International Congress of Vertebrate Morphology12. Prague, Czech Republic.
2019/07/20-25 (cf. 口頭発表約 320 件, ポスター発表約 190 件)

発表： Egawa, S., Botelho, J.F., Bhullar, B.A.S.

On the Morphogenetic Historiography of the Archosaur Femur. (口頭, 査読あり)

参加報告

この度参加しました ICVM は 3 年に一度開催され、脊椎動物の形態学者の集まる国際会議として、今回は 35 を超える国と地域から 700 人以上の参加者がありました。口頭発表のセッション数は 100 を超え、様々なカテゴリーに分かれており(例えば、体の部位ごと：頭部/四肢/脊椎/神経、行動ごと：走行/飛行/摂食/把持、手法や学問分野ごと：古生物学/進化発生学/多様性/生態学/バイオメカニクス/家畜化/教育/その他新規手法,概念開発)非常に学際的でありました。私の研究対象は、恐竜(古生物学)の運動器(四肢、バイオメカニクス)についてその発生(進化発生学)を推論すること(新規概念開発)ですので、本会のセッションはどれに参加しても非常にエキサイティングなものでした。中でもプレナリートーク発表者の大御所研究者のプレゼンテーションには、研究内容の充実もさることながらその背景に深淵な世界観や思想があり、人智を最前線で拡張し学界を牽引している人間というものが如何様なのかを間近で体験できたのは貴重な経験でした。今後の研究者キャリア形成の上で大きなロールモデルになると思われま。私の研究をお聞かせしたかった海外の卓越した研究者は、しばしば私の発表の裏で議長をしており、発表そのものをお聞かせすることは叶いませんでしたが、長いコーフィーブレイクが設けられていたことと、学会会場となっているホテルでの食事を一緒に取る機会があったことなどに助けられ、直接私の研究をお聞かせできる機会があり、これが複数人との共同研究の約束につながりました。

日本の動物学との対比についても僭越ながら少し感想を述べたいと思います。海外の研究者は学生も教員も女性比率が高い点、日本の動物学は背景思想の点で水準が高いが多様性が乏しい点が、最も強く印象に残りました。これはおそらく、海外先進国の方が、動物資料や研究機材の豊富さ・学生生活や出産などのライフイベント支援の充実性の点で優れており、研究参加への敷居が低い為、結果として研究者の性別にも研究の内容や水準にも多様性がもたらされたからなのではないかと考察しております。これを結論とするには早計ですので、今後とも考察を続けていかななくてはならないと考えております。

本会での発表を通じて構築した人脈や経験は、私の今後の研究者キャリアにとって非常に重要なものとなり、今後の研究を大きく発展させるものと感じております。ディスカッションの多くは学会会場となっているホテルで行いまして、これは会場から遠く離れた安宿に宿泊していたら実現しませんでした。このような貴重な機会をサポートしてくださいました、故川口二郎先生並びに日本動物学会の方々へ今一度深く感謝申し上げます。